ごちといふ、此ほしはすばるをいふ、凡て九月の節より正月の節中は、すばる星の出入にひより變りやすし、江戸にては下總こちといふ、

〔袖中抄二十〕ひかた　あなし　志なとの風　こゝろあひの風　志のゝをふゞき

あまぎりあひひかた吹らしみづぐきのをかのみなみになみ立わたる

顯昭云、ひかたは坤風也、無名抄云、ひかたは巽風也、ひるはふかで夜ふく風也、私云、たつみの風をば、をしやなと云、又伊勢ごちといふ、又いぬゐのかせをばあなしといふ、

〔倭訓栞前編比二十五〕ひかた　万葉集に日方吹といへるは、申酉の風をいふ、蝦夷にても志かいへり、夕日の空に吹を、船人の語にも、ひかたのよひよわりといふ、晩に其方より吹は強きものながら、暮すぐるほどに、かならずよわる也といへり、

〔倭訓栞前編波二十四〕はえ　南風をいふは、翻譯名義集に、婆度此云風神といへるに本けりといへり、凱風也、琉球にもはえといへり、京にてはやうづといへり、中國の船人、五月の南風を、あらはえといひ、六月の末の風を、志らはえといふ、西國にて東南の風をおゑやばえといふ、

〔倭訓栞中編阿一〕あなぢ　西北風をいふ、西土にいふ不周風也、ちは風の訓、こちまぢのちに同じといふめり、一說に、此風吹ば雨なし、水氣までを吹拂ふをもて、あなしともいふといへるはいかゞ、

畿内及中國の船人の詞に、西北の風を、あをせといふは、あなじの轉語也、

〔碩鼠漫筆二〕あなしと云ふ風　あなしの名義は、いまだおもひ得たる說もあらねど、袖中抄卷二十に、いぬゐの風をあなしといふ八雲御抄卷三、藻鹽草卷一等にも同じく見ゆ、とあるを見れば、あなはもし戌（イヌ）の轉訛にて、其方よりふく風の名にはあらじか、和歌分類風部に、あなしは戌亥の風なり、又說辰巳の風なり、又和州穴師山の風を云といへり、穴師山の風より、いひそめて、いづこにもいふなり、戌亥といひ辰巳といふは、和州穴師山を乾に受たる里人のいひ、辰巳にうけたる里人のいへるなり、巳上貞德說とみえたり、顯昭法橋の東國如何といはれたるも、もしかやうの思ひとりにはあらじか、そはかくまれ、この說はうけがたし、志は志ぐれ、志まき、あらし、つむしの志にて、風の義なら